駆け落ち

宮原昭夫

駆け落ち

駆け落ち

昭和四十七年九月二十五日　第一刷

定価　六〇〇円

著者　宮原昭夫

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
TEL　東京二六五―一二一一
郵便番号　一〇二

印刷　凸版印刷
製本　中島製本

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

著者略歴

昭和七年横浜に生まれる。
昭和三十五年早稲田露文科卒業。
昭和四十一年「石のニンフ達」で第二十三回文學界新人賞受賞。
昭和四十七年「誰かが触った」で第六十七回芥川賞受賞。

© 1972 / AKIO MIYAHARA　0093―302530―7384

発表誌一覧

駆け落ち	文學界　昭和四十六年十一月号
カッサンドラの地獄	文學界　昭和四十七年九月号
禁猟区	別冊文藝春秋　一一六号
ためいきの総括	文學界　昭和四十五年十一月号
指	新　潮　昭和四十四年九月号

砧をうつ女　李恢成　五五〇円
オキナワの少年　東峰夫　五〇〇円
家を出る　山田智彦　七〇〇円
タルホ＝コスモロジー　稲垣足穂　八五〇円
はにわの子たち　畑山博　七〇〇円
芥川賞受賞作「いつか汽笛を鳴らして」収録
蝸牛のように　畑山博　六〇〇円
死の遍歴　中村真一郎　七五〇円
死者の奢り　大江健三郎　五五〇円
見知らぬ家路　黒井千次　六八〇円

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

駆け落ち……5
カッサンドラの地獄……63
禁猟区……107
ためいきの総括……167
指……205

駆け落ち

装幀　駒井哲郎

駆け落ち

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1

裕子は高校三年のこんにちまで、祖父について誰からも殆どなにも聞かされたことがなかったのに、突然気付いた。

それに気付いたのは、彼女が家出先の宮城県の山の中の民宿から、駆けつけて来た父と母に連れもどされて、気まずい道中のあげく、やっとわが家へ着いた時だった。

帰りの座席指定の急行の車中でも、母は、はちきれそうなほど胸に詰まった感情をもてあましたようにいらいら興奮して、しゃべり続けていたが、それはもっぱら、

「弘の勉強机も、そろそろ買い換えてやらないとね。だいぶきゅうくつそうになってきたから」

とか、

「純さんのとこの早苗ちゃんのおめでたのお祝いは、なんにしたらいいかしらねえ」などといった話題ばかりなのだ。

父の方は、浮かぬ顔で車窓の外を眺め続け、時折黙って立って行って、三人分の駅弁やらジュース類やらを買って来ては、また窓外へ視線をそらし、黙々と罐ビールをまずそうにすすったりしている。

やっとわが家にたどりつくと、和服に着換えた父は、ひとまず茶の間のちゃぶ台の前に坐り込むが、目の前でうつむいて坐っている裕子をちらっと見ると、すぐにまた、そそくさと立ち上がり、

「とにかく、まず風呂でも沸かして、さっぱりして、と……」呟きながら、湯殿へ行ってしまう。

しばらくそこでごとごと音を立てていたが、やがて父はもどって来て、大きな湯呑みで熱いお茶をすすりながら、しばらく黙っている。

母は着換えを済ますと、すぐに、まだ出してなかったごみバケツを表に出したり、お茶を入れたり、座敷や廊下をざっと掃き出したりしていたが、その時、前掛けをはずしながら茶の間へ入って来て、黙ったまま、もものしくちゃぶ台の横に坐り込む。

すると、父は、

「火加減はどうかな」呟いて、また立ち上がりかけるが、その時ふと裕子の方を振りかえって、まじまじと彼女を眺め、びっくりしたように、

「おまえは、お祖父さん似だなあ」感に堪えたように言う。それから、父はわれにかえったように再びそそくさと湯殿へ行ってしまう。母はそんな父を見送ってから、大きな溜息をつく。

裕子は、私立の女学校に、中学から高校へと通いつづけて現在に至るまで、ごく普通の女学生だった。勉強も、秀才とまではゆかないが、とりたてて出来ない方でもない。特に問題を起こして父兄が学校に呼びつけられたりするはめにおちいったこともない。友人関係もけっこううまくいっているが、特に熱烈な友情の対象になったり、クラスの人気者になったりしたためしもない。英語と音楽の時間が好きで、数学が嫌いな、しごくあたりまえな少女だ。

ただ、このごろ、もう初老の父のことが妙に癇にさわるようになってきた。といっても、とりたててどうということもない。たとえば、毎朝きっちり六時半に、かならず父が寝床の上にむっくり起き上がり、蒲団の上に正坐して、両肩を同時にせわしく上げ下げする体操を始める。撫で肩の父は、面白いほど上下に大きく肩が動くのだが、それを目にしながら、裕子は、自分がまだ

幼かった頃からこの父は毎朝かならずこれと寸分変らぬ体操をしていたはずだ、と思い付き、なんだか居ても立ってもいられないような気がしてくるのだ。肩の上げ下げが済むと、首を前後に二十回ぐらい動かし、次は左右にかしげる運動、それから左右に振りかえる運動、大きく首を一回転させ、今度は逆に一回転させる運動、それらをいつも同じ順序で黙々と入念に行い、最後に両腕を拡げながら深呼吸を五回くらいして、それからやおら便所に立って行くことまでが、毎朝寸分変わらないのだ。

洗面所で父が高らかにうがいをする声。ラジオのスイッチをひねって朝のニュースを聞きながら黙々と朝食をとる父。ゆっくり食べ終ったかと思うと、にわかにあわただしく洋服ダンスの所へ立って行って、背広を着込み、ネクタイを締め上げてから、必ずカラーに指をつっ込んで少しゆるめ、首を動かしてためしてみてから、蛇腹のたるみ始めた黒い革鞄を下げてそそくさと門口を出て行く。いつも同じだ。まったく同じだ。それがこのごろ裕子の神経にさわって仕方がない。たとえば、ああ、そろそろうがいが聞えるな、などと思うと、もうそれだけで裕子の頭はぴんぴん痛んできてしまうほどなのだ。

父が生まれたのは、今この一家が住んでいる都会と同じ県内の、もっと内陸へ入ったところのへんぴな在所だとは聞いているが、そこに父の生家や親戚が残っているわけでもなく、彼女もつ

いぞ連れて行ってもらった憶えもない。そういえば、いつぞや、祖父は北の山国の大地主の本家の生まれだ、とちらっと聞きかじったことがあるような気がする。あらためて思いかえしてみると、裕子の一家は、父の兄弟姉妹の家庭とは親しく行き来しているが、祖父の代までさかのぼった親戚とは、彼女は全く会ったこともないし、うわさを聞いたこともない。考えてみればちょっとおかしいな、と彼女はいまごろになって気が付く。

なんでも祖父は四十代で亡くなったということだから、もちろん彼女は生まれてもいなかった。しかし、彼女が小学校に上がった頃に亡くなった祖母のことは、一つの屋根の下に暮していたので、彼女もよく憶えている。彼女が生まれてはじめて立ち会ったわが家の葬式が祖母のそれだったせいもあって、祖母のイメージはかなりあざやかに残っている。

彼女の記憶の中では、祖母はもう初めから老いさらばえた老婆だった。身体が腰のところから、くの字にまがり、もう殆どおもてへは出られなかったが、たまに出るときは、黒い細身の洋風のステッキにすがって、まるで四つ足の動物のように、上体が地面に平行になりそうな姿勢で危うげに歩いていた。切り髪にした、薄くなった頭髪を、それだけは偏執のようにいつも真黒に染めていたが、和服の着つけがゆるみ、裾前が割れて、地面に引きずり勝ちだった。そのくせ、その異様に黒々とした、つややかな髪からは、いつも椿油の特有な香りがただよっていた。

亡くなる一、二年まえからは、祖母はすっかりぼけてしまい、若い頃から欠かさず常用していた香水と、トイレに置いてある臭気消しの芳香液との区別がつかなくなったらしく、用を足すついでに、大瓶からじかに衣服へやたらに振りかけるので、祖母の身体からは、いつもただならぬ臭いが立ちのぼっていた。一つには、お尻の締りがなくなって、気が付かないうちにもらしてしまったりするので、ぼけた頭ながら、自分の身体の異臭を恥じてごまかそうとするらしかった。周囲の者がたまりかねて、オーデコロンの大瓶を買って、あてがっても、彼女は嗅覚までぼけてしまっているらしく、オーデコロンも衣服にしみがつくほど大量に振り掛け、それでも足りずに、トイレの瓶の分まで併用するので、ラベンダーの濃い香りとトイレ用芳香液のツンとくる香りと、排泄物の臭いとがミックスして、異様な猛烈な臭いの塊が、部屋の中を歩いている、という感じで、祖母が屋内のどこに居るか、見ないでも判るほどだった。裕子などは、臭い臭いと悲鳴を上げて、祖母から逃げ廻ってばかりいた。

若いころはかなり彼女の激しい嫁いびりの獲物にされたらしい母は、いつぞや裕子に、

「お祖母さんも、複雑な家庭に生まれて苦労したんで、やっぱりどこかひねくれたところがあったわね。……だけど、若い頃から、おしゃれなことは、とてもおしゃれだった。小柄で色が白くって、いつも身ぎれいにしてたから、けっこうきれいなおばあちゃんだったわよ」と言ったこと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com